

# 「地域のコミュニティ再生に向けて」

## 震災前の陸前高田

伊東文具店は、昭和36年に私の父が当時の高田駅通り商店街で創業し、51年には書籍の取り扱いを開始、平成元年の法人化にあたり実家の屋号の「山十」（やまじゅう）を冠した社名としました。

長男の私は、学校を出てからは金融機関に、弟は文具店メーカーにそれぞれ就職し経験を積んだのち、高田に戻り家業に従事しました。その後、平成7年、父の死去により私が社長に就任、12年には「アバッセたかた」の前身となるショッピングセンター「リプル」内に「ブックランドいとう」を開業、20年には弟が社長に、私は会長に就任し、私は「リプル」を含めたブックランドを、弟は文具店を中心に事業を運営してきました。

震災前は、「リプル」をはじめ国道45号線沿いにロードサイド店が立ち並ぶ一方、市内にある5つの商店街はシャッターを下ろす店舗が多く、全体的に活気を失ってきていました。また、

ロードサイド店でも夏の高田松原での海水浴客をはじめとした観光客の減少や消費の市外流出で苦戦し、なんとか盛り上げていこうというところで、商業者で様々な課題に向けた取組みを模索するといった状況にありました。

## 震災のなかで

そんな中、東日本大震災が発生、津波がすべての商店街を飲み込んでいきました。弟夫婦と跡を継ぐ予定だったその息子そして従業員1名が犠牲となり、遺体の捜索が続きました。幸いにもその後発見され、葬儀を行いました。4月の新学期を迎えておりました。

震災支援ではランドセルや筆記用具等の物資が、多くの方々から寄せられておりましたが、「自分の欲しいものを自分でそろえたい」という要望もあり、震災から1ヵ月経った4月15日にプレハブの店を構え文具の事業を再開しました。教科書も県や市の教育委員会、出版元や販売会社のご協力により、20日過ぎになった新学期



アバッセたかた代表法人  
高田松原商業開発協同組合 理事長  
(株式会社山十 伊東文具店 代表取締役)  
(陸前高田市)

伊 東 孝

期に間に合わせる事が出来ました。

その後、書籍販売の要望も強くなり、その年の12月に店舗を移設、拡張し書籍部門を再開、翌年10月には中小機構が整備した仮設店舗へ再移転し営業を続けられました。

## 復興に向けたビジョンづくり

震災以前から人口減少に悩んでいた当地区ですが、震災では死者・行方不明者が1700名以上と当時の市の人口の7%を超え、街ごとすべてが流され行政機能も大きなダメージを受けるなか、商工会が中心となった新たな市街地の復興ビジョンづくりが平成23年8月にスタートしました。その後、行政や商工業者、関係機関の方々も加わり、幾度となく検討を重ね、「かさ上げた土地に新しい中心市街地を作ろう」という基本的なビジョンが出来上がってきました。さらにその中で重要な3つのポイントを確認しました。

ひとつは、事業を再開する人は出来る限り1



正面から見たアバッセたかた（左が市立図書館）



アバッセたかた内の伊東文具店

カ所に集まって中心市街地に必要な機能を集めてコンパクトで安全な街をつくろう、ということ。人口減少が続く中、5つの商店街とロードサイドに分散していた商業機能をひとつに集めてコンパクトで効率的かつ道路ネットワークが整備され安全性を確保した街を目指すこととしました。

2つ目は、個々の店もコンパクトに身の丈に合った再建をしようということです。補助金が入るとどうしても大きな計画になりがちですが、将来を見据えれば多大な投資は大きくなりスクになるので、小さくてもいいからまとまってやろうとの判断からです。

そして3つ目は、コンパクトな中にも核となる施設を中心に盛り上げていこうということ。以前あった「リプル」を中心街の真ん中に持ってきて、さらに公共施設も集約し賑わいを

生んで行こうということになり、核施設建設の構想が出来上がりました。

### 復興の先導役として

こうして地元商工業者をはじめ地域の皆で話し合い、考えを摺り合せ、共有した将来ビジョンが出来上がりましたが、当地では前例のないほどの大規模な土地のかさ上げ工事が行われ、仮設店舗での営業が長期化することが当初から予想されていました。そこで、核となる施設を先行して整備し、後に続く弾みにしようということになりました。

そして昨年4月、かさ上げ地区の中心部にスーパー、衣料、ドラッグストアの大型専門店と地元の14店舗が出店する専門店街が一体となった商業棟と市立図書館（7月開館）からなる大型複合商業施設「アバッセたかた」が完成し、

新中心市街地の先導役としてオープンしました。「あばっせ」は「一緒に行きましょう」という意味の地元の言葉で、いつまでも言われ続けるよう努力しようとネーミングしました。

当伊東文具店も専門店街の図書館入口横に店を構えました。本屋はネット書籍等に押されがちですが、今回の震災で町の機能として必要なんだとお客様から教えられました。地域唯一の書籍文具店として、本を探し立ち読みしたり、文具を探したりと、いつでも気軽に立ち寄っていただき、開かれた本屋・文具店として集客の拠点となるべく、地域のあらゆるニーズに応えるよう品揃えを充実させ開店いたしました。

### 新たな賑わいを目指して

「アバッセたかた」の周辺には飲食店や物販店などの開店も相次ぎ、最終的には120ほどの事業者が集まります。それまでは、もう少し時間がかかりますが、隣接する「まちなか広場」では晴れた日には笑顔で遊ぶ家族連れや中高生などの若者の姿が見られ、人が集まる場所として、地域のコミュニティの再生を少しずつ実感しています。

街の形も少しずつ見えてきましたが、これらが本場の意味での復興です。人口減少が続く商圏がより小さくなる中、観光客も含めた交流人口の中心市街地への誘引など課題も沢山あります。今後は建物などのハード面とともにソフト面でも工夫を凝らし、皆で協力しながら陸前高田ならではの新たなコンパクトシティの仕掛けづくりを行い、賑わい創出を図っていききたいと思っております。